



**G-COE・GIARI・第3回・国際シンポジウム
「東アジアにおける経済統合と持続的発展」**

第3セッション

「アジアにおける環境協力とサステナビリティ」

GIARI定例研究会・2009年11月9日

松岡 俊二

smatsu@waseda.jp

第3セッションの構成

- セッションチェア: 松岡 俊二(早稲田大学)
- 15:50～16:30「アジアにおける経済成長と持続性: 効率的環境ガバナンスの形成」
報告者: 植田 和弘(京都大学大学院経済学研究科・教授)
討論者: 寺西 俊一(一橋大学大学院経済学研究科・教授)
- 16:30～17:10「アジアにおける環境協力と環境技術」
報告者: Mushtaq Ahmed Memon (UNEP/IETセンター・研究員)
小寺 洋一(産業技術総合研究所・主任研究員)
討論者: 太田 宏(早稲田大学国際教養学部・教授)
- 17:10～17:50「アジアにおける環境協力と多国間環境協定」
報告者: Aboejoewono Aboeprajitno (BCRC東南アジア・所長)
討論者: 田中 勝也(滋賀大学環境総合研究センター・准教授)

セッションの目的

- Economic interdependence and social exchange has remarkably progressed in Asia. According to these regional de-fact integrations, environmental issues like air pollution, GHGs emission and biodiversity loss have been becoming serious problems in this region. However, regional environmental institutions (governance) to tackle on these issues are not sufficient and not effective, so far.
- This session will give highlight on **regional environmental cooperation and institutions**. Inviting distinguished scholars and policy makers from Asian countries, we will discuss the **present situation** of Asian regional integration and how to make more effective environmental cooperation and/or institutions in Asia. Furthermore, we will discuss Asian perspective to resolve global environmental issues and Asian contribution to global sustainability.

国際環境協力・国際環境制度研究について

1. 国際開発援助などによる国際環境協力に関する研究

→環境ODAの事業・計画・政策に関する研究(ODA事業評価や環境政策の移転を含む), Cassen, R.(1987), *Does Aid Work?*

2. 国際環境制度、国際環境ガバナンス、国際環境レジームに関する研究

→国際環境条約に関する研究

Haas, Keohane, and Levy (1993), *Institutions for the Earth: Sources of Effective International Environmental Protection*

国際環境協力研究の潮流

- 1) 国際環境ガバナンスの有効性や効果などに関する Robert Keohane、Peter Haas、Oran Youngなどの国際関係論的研究
- 2) 1992年世銀・世界開発報告などを契機とした環境クズネット曲線(EKC)仮説の途上国への適用や環境協力(環境援助)の効果をめぐる環境経済学的研究
- 3) 先進国の環境政策の途上国への移転に着目した環境政策学的研究
- 4) 援助評価(効果的援助)の視点から行われる環境協力プロジェクトの評価研究
- 5) 援助の視点とは異なるが、貿易・投資・FTA/EPAなどによるグローバル化の進展・国際的分業システムの形成における、途上国への環境インパクト評価と国際(地域)環境協力の重要性の解明といった国際経済学的研究

EKC研究について(1)

(1) 初期のEKC研究

WB, World Development Report 1992

Grossman & Krueger (1995)

経済発展指標と環境汚染指標の間に、逆U字型の関係が成立するか否かの検証

(2) 弾性値分析と社会的環境管理能力に関する研究

松岡ら (1998)

Matsuoka (2007)

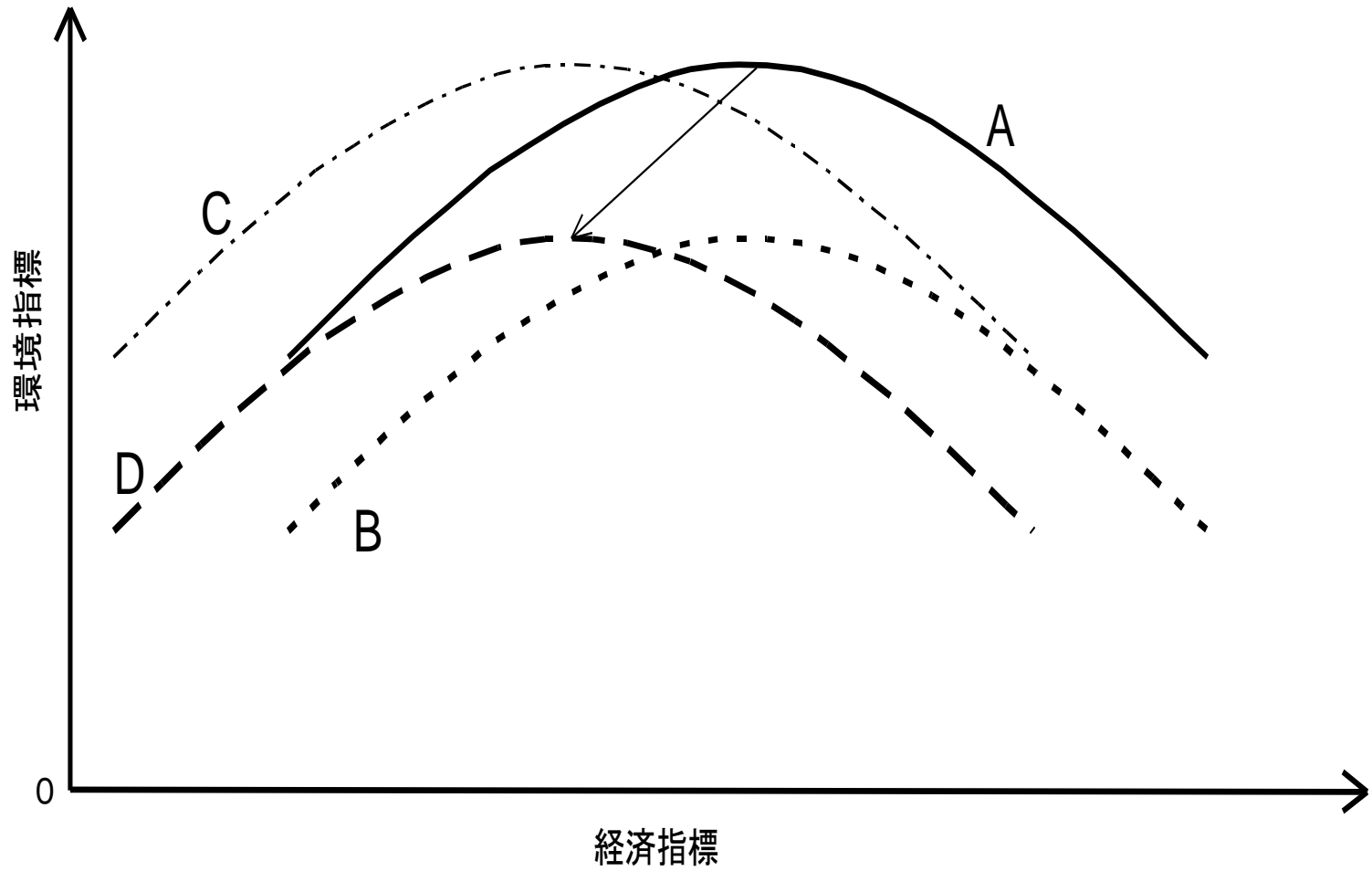
ターニングポイントの原点方向への移動可能性

(3) EKCのシフトに関する研究について

Markandyaら (2006)

ヨーロッパ12カ国: 環境規制の導入により、逆U字が下方にシフト

環境クズネッツ曲線 (EKC) のシフト



EKC研究について(2)

(4) EKC研究の成果と課題

Stern(2004) : EKCは経験則であり、計量経済学的に弱い側面がある

(5) 最近のEKC研究

Bernauer & Koubi (2009) : モデルの精緻化

(6) EKC研究の国際環境協力研究への応用

「EKC研究を国際環境協力研究へ応用する意義は、原点方向へのシフトを観測することで、環境協力の効果を計測することができる点である。逆U字が成立する汚染問題に限定されるが、国際環境協力評価の点からみると、有効な方法である」

→意義と限界

国際環境制度の有効性研究について(1)

Wiess and Jacobson (2000), *Engaging Countries: Strengthening Compliance with International Environmental Accords*

→国際環境条約の遵守の要因(利害集団、情報、行政能力、国際的動向)

Kanie and Hass (2004), *Emerging Forces in Environmental Governance*

→制度の内部におけるアクター間のパートナーシップのあり方

Oberthur and Gehring (2006), *Institutional Interaction in Global Environmental Governance*

→制度間の相互作用

→制度の有効性(effectiveness)を規定する変数は何か？

従属変数と独立変数

国際環境制度の有効性研究について(2)

従属変数(目的変数):

Young (1999), *the Effectiveness of International Environmental Regimes*「環境問題の解決や緩和につながる行動を促すようなレジームの形成が制度の効果である」→制度の有効性・効果とは何か？

独立変数(説明変数):

Young (1996), *Global Environmental Change and International Governance*,

Young (1999), *the Effectiveness of International Environment Regimes*

→内生変数と外生変数

Haas, Keohane, and Levy (1993), Keohane and Levy (1996)

→関心(concern)、契約(contract)、能力(capacity)という3Cから国際環境協力の有効性(問題性)を分析

Miles (2004)→「問題の悪性(malignancy of the problem)」と「問題解決能力(problem solving capacity)」

国際環境レジームの定量研究について(1)

国際環境条約 (international environmental agreements; IEAs) の重要性
700以上の多数国間環境条約 (multilateral environmental agreements;
MEAs) と、1,000以上の二国間環境条約 (bilateral environmental
agreements; BEAs) (Mitchell, 2003)

Young (2008): 1) 問題との適合性、2) 社会的実践能力、3) 制度的適応性

統計的手法を用いた国際環境レジームの定量的な分析

1) 特定のレジームのみを対象とした分析: 加盟状況と環境質のデータによる
回帰分析, Helm and Sprinz (2000) や Sprinz and Helm (1999)

2) 多種多様なレジームを対象とした分析: 環境レジームの有効性の要因
Mitchell(2004)

$$\text{CRB} = \alpha + \beta_1 \text{MEMBER} + \beta_2 \text{SANCTION} + \beta_3 \text{MEM-SANCT} \\ + \beta_4 \text{CINCOME} + \beta_5 \text{CPOP} + \dots + \beta_K \text{OTHER}$$

国際環境レジームの定量研究について(2)

Ward (2006)

→国際協調の度合い(Regimecentrality)、国際協調への前向きな姿勢→持続性へ貢献

民主主義や政治の安定性などのガバナンスが環境に与える影響の分析

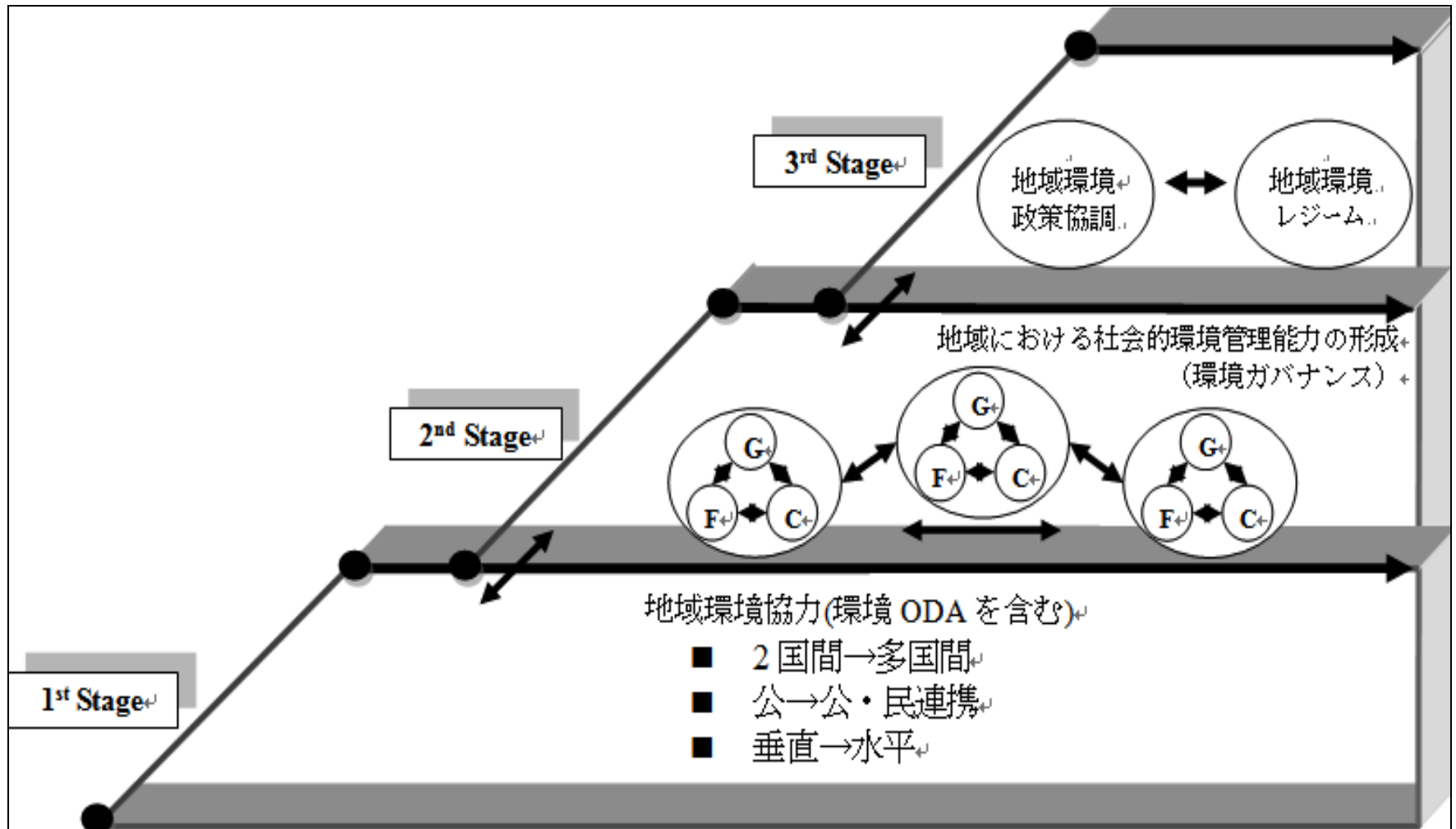
Li and Reuveny (2006)

Andersson and Gibson (2006)

Dasgupta et al. (2004)

→民主主義などのガバナンスが環境パフォーマンスに影響を与える

地域統合と地域環境協力の進化モデル



S3の論点：アジア環境ガバナンス研究

1. 発展（進化）のプロセス

制度の発展要因と阻害要因

制度の束（基軸と補完）：制度間の相互作用

制度の内と外（制度間）、アクターの関係、社会的能力

2. 評価の基準と方法

基準：有効性・効率性・公平性・持続性など

3. 重層性・多面性の把握

Global, Regional, National, Local

UN、政府、NGO、企業

4. アジア環境共同体の形成とアジア環境ガバナンス

デ・ファクトな (informal) 制度化の進むアジアの地域環境協力

欧米 = de jure、アジア = de fact なのか？

東アジアには共通体験の蓄積がなされてきているのでは？

Global platform の活用：regionalizationはGlobalizationとシンクロナイズ